

主 題：神の子どもとされる2

聖書箇所：ローマ人への手紙 8章15-16節

思い出してください。パウロは「イエス・キリストを信じて救われた者たちの特徴」を私たちに教えてくれました。それは罪から離れて神に喜ばれるように正しく生きることであると、そのようにパウロは13節で私たちに教えてくれました。そして、そのように生きている人は間違いなく救われている、永遠のいのちをいただいている、その根拠を14節に見たわけです。なぜなら、その人は神の子どもだからとパウロは言います。そして、私たちは前回、14節から「神の子どもの特徴」を学び始めました。

☆神の子どもであることの三つの特徴

A. 主のご支配を望む 14節

主なる神によって常に自分のすべてを支配していただくことを望んでいる者たちだと言います。神によって自分のすべてが支配され導かれて行くことを望んで生きる人たちであるとパウロは教えてくれました。その信仰者としての歩みに関して、余りにも大切なので、皆さんに繰り返して話しますが、ぜひ、思い出してみてください。私たちが信仰者として歩んで行くその信仰生活、そこには私たちの「選択と決心、そして行動」が含まれていたことを思い出してください。私たちは自分の考えや思い、自分のことばや態度のすべてが主に喜ばれたいと、その願いを持つだけでは十分ではない、それだけではなく、実際に主が喜ばれることは何なのかを考えて、そのことを選択しながら生きて行くことが信仰者の責任であると、パウロはその様に教えてくれました。

だから、私たちは何が正しいことか、何がみこころなのかをしっかりと見分ける判断力を養って行くことが必要なのです。訓練されなければいけないのです。何が神の前に正しくて、何が神の前に喜ばれることなのか、何が神のみこころなのかと。そして、感謝なことに、そのように神が喜んでくださる生き方、主の栄光を現わして行く生き方をあなたが実践するために、主は必要な助けをちゃんと備えてくださっているのです。ですから、その助けをいただきながら私たちは歩んで行くことが出来るのです。パウロは8：8で「肉にある者は神を喜ばせることができません。」と言っています。私たち信仰者は、罪の中を歩み続けて行くこと、主のみこころに逆らって生きることがどれ程主を悲しませるのかということをもっと覚えなければいけません。主に喜んでいただくために、私たちは私たちのすべてを主に支配していただき続け、その様に生きて行くことが神に喜ばれる正しい歩みの秘訣であると教えられました。

14節「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。」

信仰者の皆さん、あなたはきっと神に喜ばれる歩みをしたいという願いを持って歩んでいらっしゃるでしょう。その思いを持つことは大切です。しかし、問題はどのように歩み始めているかどうかです。私たちは神が教えてくださっていること、神が命じておられることを神の助けをいただきながら実践しようとしているのでしょうか？そうして私たちは変えられて行きます。神によって救われた者たち、神の子どもとされた者たちは、そのように神が喜んでくださるように生きて行きたいゆえに、神にいつも支配していただいて、自らのすべてを支配していただいて、そして、私たちが神の栄光のために用いていただきたいと、その思いを持って生きている人たちだと言います。そのことを私たちはこの14節で見たのです。

B. 主との交わりを喜ぶ 15節

主なる神との交わりを喜ぶ者、それが神の子である人の特徴、証拠であるとパウロは言います。15節「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。」。前回も見たように、この15節のみことばを原語から直訳するとこのようになります。「なぜなら、あなたがたは、再び恐怖へと導き入れる奴隷の霊を受けたのではなく、養子の霊を受けたのである。その霊によって私たちは、「アバ、父。」と呼ぶのである。」と。ぜひ、注意、注目していただきたい点は「養子の霊」ということばです。このことについて私たちはみことばを見て行きます。パウロはこの15節で何を教えようとしたのかというと、私たちイエス・キリストを信じる者たちが、信仰をいただいたときに、救いをいただいたときに神から与えられた聖霊なる神のことです。

もうすでに私たちは、聖霊なる神はイエスを信じる人に内住してくださるということを見て来ました。イエスを信じるクリスチャンであるあなたの内に聖霊は住んでいるのです。聖霊なる神はあなたを全く新しく生まれ変わらせてくれると見て来ました。新しくされたあなたについて、聖霊なる神の働きにつ

いて、パウロはこの15節に説明を加えるのです。パウロはその説明をかつての自分たちと今の自分たち、救われる前と救われた後、この二つを対照しながら教えようとしています。

1. 救われる前の私たち=かつての私たち

その様子をパウロは二つの名詞によって表わしています。それは「奴隷」ということばと「恐怖」ということばです。これが救われる前の私たちだったというのです。

1) **奴隷**：奴隷ということばについて皆さんに詳しい説明をする必要はないと思います。私たちはローマ書6章からこの8章までに、繰り返して、人間は例外なく生まれながらに罪の奴隷であると学んで来ました。すべての人間、ここにおられるすべての皆さん、世界中のすべての人、人類の歴史を振り返って、イエスを除いたすべての人です。当然、アダムとエバを造られたときはそうではありませんでしたが、人は罪の奴隷として生まれて来るのです。罪の奴隷であるゆえに、私たちは例外なく主なる神の審判、そして、その結果である永遠の滅びへと向かっていたと言います。すべての人間は例外なく、自らの罪ゆえに永遠の滅びへ、永遠の地獄へと向かっていた、それが私たちでした。罪の奴隷であったと、パウロは再びここで言うのです。

2) **恐怖**：もう一つ、パウロは「恐怖」ということばをここで使っています。救われる前の私たちは、希望ではなく恐怖を持って生きていたと言います。何に対してでしょうか？死に対してであり、死んでから後のことであり、自分の永遠に関してです。私たちは死んだ後も天国に行けると、そのように一生懸命自らを信じ込ませて来ました。しかし、私たちはどちらかと言うと、恐れを持ちながら、恐怖を持ちながら歩んでいたのです。なぜ、私たちは恐怖を持つのでしょうか？もし、先のことから分からないだけだったら、私たちは恐怖ではなく不安を持ちます。これからどうなっていくか分からないから不安になる、今の世の中を見るとこれからどうなるか分からないから不安になります。しかし、パウロが言うのは私たち人間は恐怖、恐れを持っていたということです。それに関して、パウロはこのみことばの中で答えをくれます。というのは、私たちはさばきがあることを知っているからです。認めようとはしませんが、私たちはさばきがあることを知っているのです。ローマ1：32を見てください。「彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っているが、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。」とあります。ですから、私たちは人から教えられなくても、ひょっとしたらさばきがあるのではないか、さばきに服するのではないかと、そのような思いがあるゆえに、私たちは将来のことに対して恐れを持つのです。

もちろん、永遠の地獄を望んでいる人を除いてのことです。地獄に行きたいと思っている人は別にそのようなことを恐れはしないでしょう。しかし、一般的に私たちは永遠の希望もなく、ただ恐れを抱きながら日々を過ごしていたのです。私たちが出来たこと、そして、して来たことは、そのようなことを考えないようにしようとするのでした。ヘブル人への手紙の著者が非常に興味深いことを私たちに告げています。ヘブル10：27「ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。」、これが私たち生まれながらの人間がずっと歩んで来たその歩みです。彼らは自分の永遠なんて考えようとはしないのです。考えたくないのです。でも、この著者が言うように「逆らう人たちを焼き尽くす激しい火」、神の審判です。神に逆らった者たち、神を信じない者たちに対する神のさばきです。それをただ恐れながら、希望もなく待つしか術がなかったのです。ヘブル2：15にはこのように記されています。「一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」、罪の赦しをいただく前の私たちの姿です。生まれながらの人間の姿です。「死の恐怖につながれて奴隷となっていた」、どうすることも出来なかったのです。私たちは自分で自分の罪の赦しを得ることはできません。神が喜んでくださるような完全な聖い人間になることなど出来ません。神が救ってくださらなければ私たちはこの救いにあずかることは出来なかったのです。

今日のテキストから、パウロが私たちに教えることは、聖霊なる神はあなたをかつての救われていない状態に導き入れるようなお方ではないということです。逆に、そのような所から救い出してくださる方だと言っているのです。ですから、8：15に「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、…」とある通り、このような働きをする聖霊なる神を私たちはいただいたのではないということをお願いしたいのです。聖霊なる神は罪から救い出してくださるわけで、あなたをもう一度罪に引き戻すような働きをする存在ではないと言うのです。

先程見たように、私たちは神の一方的な恵みによって、ヘブル2：15にあった通り、「一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださる」と、神はそこから私たちを自由にしてくれる。永遠に対して全く希望のなかった私たちを救い出してくださり、そして、希望を持って生きられるように、勝利者として生きて行くことができるように私たちを生まれ変わらせてくださったのです。だから、パウロはIコリント15：55で「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるの

か。」と言いました。また、57節でも「しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」、罪に対して、この永遠の滅びである地獄に対して、神は私たちに勝利をくださった。そこから解放されたのです。イエスはヨハネ14：19でこのように言われました。「いましばらくで世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるのです、あなたがたも生きるからです。」と、ものすごい大きな慰めのみことばです。イエスは確かに私たちの罪を負って十字架で死んでくださった。葬られた後、敢然と肉体をもってそこからよみがえって来られた。この永遠に生きる方を受け入れた私たちは、彼とともに永遠を生きるのです。そのことを考えるだけでもわくわくして来ませんか？私たちはこの方とともに永遠を過ごすのです。この方のために私たちは神を賛美しながら永遠を過ごして行くのです。私たちはこの恐怖からも解放されました。私たちを捕らえていた罪の奴隷からも解放されました。私たちは勝利者として、解放された者として新しい歩みを始めるのです。そのような者へと生まれ変わったのです。それがクリスチャンです。

かつての私たちのことを話したパウロはその後、同じ15節で今度は「救われた今の私たち」へと話を展開して行きます。

2. 救われた今の私たち

救われた今の私たちは「子とされた」とあります。新改訳聖書では「子としてくださる御霊」と書かれています。

1) 子としてくださる

このことばは「子ども」と「制定する」という二つのことばが合わさってできたことばです。新約聖書の中には5回しか出て来ないことばが使われています。このことばの意味は、最初に原語をできるだけ直訳すると言って読んだその訳では「養子」という意味があるのです。「子とされた」とか、新改訳聖書では「子としてくださる」というこのことばには「養子とする」、「養子縁組」という意味があるのです。また、別の辞書を見ると「すべての権利、特権、責任を伴う新しい家族の関係を意味する」と言います。全く新しい関係に入れられるということです。私たちは暫くこの「子としてくださる」こと、「養子」ということばに注意して学びたいと思います。というのは、非常に大切なことばだからです。

それでこのことばの意味を理解するためには、パウロの時代の「養子制度」について知ることが必要です。パウロは敢えてこのことばをここで使ったからです。今の私たちクリスチャンは「養子とされた」と。ですから、パウロが使ったこのことばはどう意味を持っていたのか、どう意味で使ったのか、そのことを知ることが必要なのです。旧約聖書には「制度としての養子縁組」は記されていません。しかし、聖書には確かに養子のことが記されています。

(1) モーセ：エジプトにおいてヘブル人が増えて来て子どもを殺そうということになったそのときに、モーセの親はかわいいモーセをナイル川に流しました。それを見つけたのはパロの娘でした。そして、実の母親によって育てられたモーセは大きくなったときにパロの娘のところに連れて来られ、そのときにパロの娘はモーセを「自分の息子」としました。出エジプト2：10「その子が大きくなったとき、女はその子をパロの娘のもとに連れて行った。その子は王女の息子になった。彼女はその子をモーセと名づけた。…」

(2) エステル：ユダヤ人モルデカイは両親のいないこのエステルを自分の娘として引き取ったとエステル書2章7節に記されています。「モルデカイはおじの娘ハダサ、すなわち、エステルを養育していた。彼女には父も母もいなかったからである。このおとめは、姿も顔だちも美しかった。彼女の父と母が死んだとき、モルデカイは彼女を引き取って自分の娘としたのである。」

ですから、確かに制度ではなかったのですが、このように自分の本当の子どもでない者を自分の子として迎えるということが記されています。しかし、私たちがパウロが使ったこのことばを理解するためには、その当時のローマの社会における養子の制度を知ることが大切です。というのは、この当時、ローマにおいては養子縁組の手続きは非常に難しかったのです。パウロはそのことを重々理解していました。なぜ、難しかったかということ、当時のローマには家父長制とうものがあつたからです。その家における年長の男性、一般的には父親ですが、父親によってその家族のすべてのメンバーは支配され所有されているという考え、このような家族制度です。ですから、家族の者は、特に子どもたちは父親に対して絶対服従が要求されました。家長には家族の生活権、つまり、生きることも殺すことも家長の自由だとする、そのような権利までも与えられていたのです。ですから、そういう社会ですから、養子を貰うということは非常に難しく、いろいろな過程を経ることが必要だったのです。ローマにおいて養子を取るということは、現在の父親の所有と支配から別の家長の支配へ入ることを意味しました。

この制度に関して、ウィリアム・パークレーはこの「養子の結果」について面白い説明をしています。

《養子にされた結果》：パークレー

①養子にされた人は彼の古い家族とのすべての権利を喪失し、新しい家族における完全な嫡出子として

のすべての権利を取得した。

つまり、養子にされた者は、今まで自分の所有者であった父親から、自分が属していたその家族としてのすべての権利を失って、全く新しい家族の本当の子どもとして迎えらる。そして、その家族のすべての権利を自分のものとする事ができるのです。

②その結果として、彼の新しい父親の財産の相続者となったのである。たとえ、他の息子が後に生まれて真の血統関係があったとしても、それは彼の権利を侵すものではない。彼は彼らとともに共同相続者としての地位を確保したのである。

③法律上、養子となった者の古い生活は完全に一掃された。例えば、すべての借金は法的に帳消しにされた。それらはあたかも、そうでなかったかのように一掃された。養子にされた人は過去とは無関係の新しい生活に入った者と見なされたのである。

④法律の立場から見れば、養子とされた人は、文字通り、また、完全に新しい父親の息子となった。

ですから、この当時に養子として迎えらるということは、かつての自分のすべてを支配していたその権威の元から完全に離れ、全く新しい権威のもとに入る。自分を支配していたその環境から完全に分かれて新しい支配の元に入るといことです。まさに、私たちが「救い」ということを学んで来たときに、みことばが教えている「救い」そのものです。パウロはこのことばを15節で教えるように、かつての私たちは罪の奴隷だった、罪に仕える者だった、別の言い方をすれば、サタンというすべての罪を支配しているその支配者に従って生きていたが、その支配から私たちは完全に解放されて、真の神である父なる神の支配の元に入れられたという意味で使っているのです。ですから、パウロはここで、聖霊なる神は信じるすべての者を神の養子としてくださる、聖霊なる神は決して、かつての救いも希望もない奴隷の状態に引き戻すのではないということを使ったのです。あなたは神の子とされた、あなたは神のあわれみによって、神の家族に養子と迎えられた。それが救われた私たちに与えられたすばらしい権利です。

2) 親しい交わりをいただいた

子とされただけではないのです。私たちは親しい交わりをいただいたとあります。15節の後半に、新改訳では「**私たちは御霊によって、**」とあります。先に話した訳から原語を直接訳すと「その聖霊によって、私たちは『アバ、父。』と呼ぶのである。」と、ここでも聖霊なる神の働きが教えられています。聖霊なる神があなたを奴隷から救い出してくださった、あなたを神の子としてくださった、神の養子としてくださったというだけではないのです。今度は、聖霊なる神があなたの内に働いて、あなたが「**アバ、父。**」と呼びます。」と言う者へと変えてくださったと言うのです。この「アバ、父。」という呼び方、父なる神をこのように呼ぶことは聖書の中を見ても珍しいことです。神に対してこのような呼び方はしません。でも、ある人物が父なる神をこのように呼びました。覚えていますか？私たちの主イエス・キリストです。マルコの福音書14章に出ています。あのゲッセネマの園にあってイエスはこのようにお祈りになりました。14:36「**またこう言われた。「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。」**、イエスは苦しみの真っ只中において「アバ、父よ。」と父なる神のことをお呼びになったのです。この「アバ」とはアラム語で「父」と言います。どちらかと言えば、子どもたちがお父さんのことを日本語で「お父ちゃん」と呼ぶように、非常に親しみを込めて呼ぶことばです。

そして、「父よ。」とはギリシャ語で「父」です。ですから、アラム語で「父」、そして、ギリシャ語で「父」と、このように二度違ったことばで「父」のことを呼んでいるのです。なぜ、この二つが並んでいるのでしょうか？いろいろな説がありますが、一つは先程見たように、イエス・キリストの模範に倣ったという説です。イエスがゲッセマネの園でそのようにお呼びになったときはアラム語を使っていました。でも、ローマにはギリシャ語を話すたくさんの読者たちがいました。ですから、アラム語だけでなくギリシャ語でも記したという説もあります。でも、この「アバ、父よ。」と呼ぶことに関して私たちが着目しなければいけないことは、アラム語、ギリシャ語ということよりも、もっと大切なことは親密さです。つまり、イエスがゲッセマネの園で父なる神に祈りをなされたときに、主イエス・キリストはご自分が父なる神とどれ程親密な関係にあるかということをお話されたのです。

私たちの生活においても、私たちはいつでも「お父さん」と言ってそこにやって来ることができるのです。そこに親しい関係が存在します。形だけの親密さではなく親密な心から「お父さん」と呼べるようなものです。イエスがゲッセマネの園でお祈りになったときに明らかにされたことは、父なる神との関係です。そして、驚くべきことは、聖霊なる神は私たちのうちに働いて、私たちもそのように「アバ、父よ。」と言わせてくださるといのです。イエスが父なる神と持っておられたその親密な関係を、信仰者である私たちも共有しているということをお話しているのです。私たちも父なる神とその様に親しい関

係に置かれていることをみことばは教えているのです。それがクリスチャンです、それが信仰者であるあなたです。イトン大学院教授のダグラス・モーは「聖霊が主イエス・キリストが父なる神との間に持っておられた同質の親密な交わりを経験することを可能にしてくださった。」と、そのような説明をしています。ですから、パウロがここで言っていることは、信仰者の皆さん、神の子とされた皆さん、救われた皆さん、あなたは神とこんなに親しい、丁度、父なる神とイエスが持っておられたような親しい間柄になれたのだということです。

私たちはこの世界のすべての者をお造りなされた神、すべてのものをその御力で支えておられる神、どんなものにも勝利なさる方、確実にみこころを為される方、ご自分が言われたことは確実にその様になる方、サタンでさえも太刀打ちできない方、この唯一真の神が「私のお父ちゃん」であり、私たちはその方を「お父さん」と呼ぶことができる、そんな者に神はしてくださったし、そういう私たちに対して神は「わたしの息子、わたしの娘」と呼んでくださるのです。Ⅱコリント6：18でパウロはこのように言います。「わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」と。皆さん、神がいつも私たちとともにいてくださる、それだけでも私たちは励まされます。「私は決して一人ではない、どんな時でも私は神とともに生きることができる、神が私とともにいてくれる。」と。でも、それだけではないのです。私たちは神とこんなに親しい関係と持つ者へと招かれたのです。全能の父を、この真の神を「アバ、父よ。」と呼ぶことができるのです。その方はあなたにいつも目を留めてくださり、あなたのためにいつでも時間を取ってくださる、あなたにとって必要なものを与え続けてくださる、あなたにとって最善を為し続けてくださる、「心配しなくていい」と言ってくださる、その方の御手の内に私たちは守られているのです。神とのこんなに親しい関係を私たち信仰者はいただいたのです。皆さん、そのことを感謝しておられますか？そのことを喜んでいますか？あなたが何かしたからではないのです。神はこのような祝福を信仰者である私たちにくださったのです。このような祝福をいただいているのは私たちだけです。神とこんなに親しい間柄にしてくださった！

私たちは先ほど特別賛美を聞きました。聖歌591番の「恐れなく近寄れ」という曲です。その一番の歌詞は「恐れなく近寄れと主は語りたもう。」と訳されています。この曲は1875年に、8000曲の作詞をしたと言われているファニー・クロスビーが書いた曲です。彼女はこの歌を作曲したウィリアム・ドーンを訪問しました。彼らがその交わりの中で夜になってもずっと話していた一つのテーマがありました。それは「主の御側にいることの喜び」についてでした。神といっしょにいること、神の御側にいることのすばらしさを話し合っているときに、ファニー・クロスビーはこの歌詞を思い、そして、歌を書き記してこの曲が誕生したのです。このすばらしい讚美歌の三番の歌詞に、このようなメッセージを綴ります。「あなたの御座の御前において、私が過ごせるそのひとときの純粋な喜び、私がひざまずいて祈るとき、あなたとわたしの神、友と、私は友として親しく交わるのだ。」と。ファニー・クロスビーは分かっていたのです。神と交わるときに私はこの方と友として交わることが赦された、そんなすばらしい祝福に私たちは入れられたと。

イエスを信じておられるあなたは、神の深いあわれみによって神の家族に養子として迎えられました。あなたは神の子どもとされたのです。それが救われた私たちです。このような祝福の中に神が私たちを招いてくださったのです。神の子とされた証拠、パウロは私たちに三つのことをここで教えてくれました。一つ目の証拠は「主のご支配を望むこと」でした。二つ目に「すばらしい神との交わりを喜ぶ者」でした。そして、三つ目に16節から私たちに教えることは「主からの保証をいただいた」ことです。

C. 主からの保証がある 16節

16節を見てください。「私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。」とあります。「あかしして」とは「ともに」ということばと「証する」ということばが一つになってできたことばです。ですから、「ともに証をする」とか「いっしょに証言する」という意味を持ったことばです。この16節では「何を証してくれる？何を証言してくれる？」と言っているでしょう？「私たちが神の子どもであること」です。だれが証言してくれるのですか？「御霊ご自身が」とあります。聖霊なる神ご自身です。そして、もう一つ「私たちの霊とともに、」と書かれています。ですから、聖霊だけが証するのではないのです。私たちの霊も、私たち自身もその様に証を為すのです。なぜ、このような書き方をしたのでしょうか？私は疑問に思うのですが、サザンバプテスト神学校のトーマス・シュレイナーという教授はこのようなことを言っています。「申命記19章15節に『どんな咎でも、どんな罪でも、すべて人が犯した罪は、ひとりの証人によっては立証されない。ふたりの証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。』と記されているゆえに、聖霊お一人ではなくて、私たちの霊、このように複数の証言でもってそれが事実であるということが証明された。そのために、聖霊だけでなく「私たちの霊とともに」と、この二つがあなたが神の子であることを証言すると記した理

由ではないのか。」と。

いずれにしろ、この16節のみことばでパウロが言わんとしていることは、救われている自分が神の子どもであるということは、私たちに内住している神がそのことを私たちに明らかにしてくれる、言い変えるなら、救われているという確信は私たちで持つことができるということです。だれか人がやって来て一生懸命説得してくれたから「ああそうか、自分は救われているのだ。」ではないのです。気をつけなければならないのは、それはひょっとすると偽りの保証を与えてしまうかも知れないことです。みことばが言うことは、救われている人、聖霊が内住している人は聖霊なる神がその人の霊とともに、あなたが救われていることを明らかにしてくれると言うのです。それがみことばが教えていることです。

私たちは過去のいろいろな出来事に立っていたいのです。例えば、過去のあるときにお祈りをした、ある時に何かに記名したなど、それが本当の救いである保証はどこにもありません。聖書が語っていることは、救いは神の贈り物であり、神がその人を救ったらその人を生まれ変わらせてくださり、新しい歩みをさせてくださり、その人自身がその確信を持つのです。この16節が教えるように、私たちが神の子どもであることは御霊が、そして、私たちの霊がそのことを明らかにする、証言してくれるのです。

私たちはどのようにしてそのことが分かるのでしょうか？私たちの内側から何か小さな声がして「救われている」と、そんな特別な体験をするのでしょうか？ジョン・マッカーサー先生は「そのようなことはあり得ない。そんなことを言っているのではない。却って、このような三つの可能性がある。」と言って、次のようなことを挙げています。

○救われていることの確信はどのように分かるのでしょうか？

①御霊の実が現われることによって、その人が救われていることが明らかになる。御霊の実が自分の生活の中により大きく実って行くことによって、自分が救われているという確信を持つのです。確かに、そのことはすでにみことばを見て来ました。

②主のために働きを為すときに、実際に主が助けてくださることを経験することによって、「ああ、自分は本当に神さまによって救われている」という確信を持ちます。皆さんもそのような経験はあることでしょうか。いろいろなときに神が働いてくださって、私たちはこの神を崇めることが多々あります。

③キリストに喜ばれる歩みをしキリストに似た者に変えられて行くことによって分かって行きます。確かに、神は私たちを変えて行ってくれます。その過程を通して私たちは「神さまは私のうちにいて、私をこのように変えてくださっている。私は神さまによって救われている。」とその様に確信を持つことができます。

確かに、このように私たちが変えられることによって、成長して行くことによって、救われているという確信が増して行くことは事実です。恐らく、皆さんも「あなたは救われていますか？」という質問を受けて「私は救われています」と言うとき、ある人は「聖書がそのように約束しているから私はその約束を信じ、そして、私の生活がこのように変られています。だから、私は救われています。」と確信を持って証できることでしょうか。「実は、私は救われているかどうか分からないけれども、あの人が一生涯懸命説明してくれたから、やっと自分は救われているのだなと思いました。」と、これはどこかおかしいのです。聖書は私たちにその確信をもたらしてくれます。ヨハネの手紙第一を見てください。ヨハネは私たちにこの手紙を記した理由を書いています。もう一度見ましょう。Iヨハネ5：13「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。」、つまり、ヨハネが言っていることは、あなたが救われているということをあなた自身がしっかりと確信できるように、この手紙を記したということです。このヨハネの手紙を見ると、救われている人の特徴がたくさん記されています。

○救われている人の特徴 —ヨハネの手紙第一から—

自分の罪を告白する 1：9に「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しいですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」とそのことが教えられています。

神のみことばに服従する

キリストを告白する イエスは私の救い主であり私の主であると告白します。2：22「偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。御父と御子を否認する者、それが反キリストです。」、4：2にもそのことが記されています。「人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。」

神の命令を守る 2：3「もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。」

キリストを模範に生きる 2：6「神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。」

兄弟姉妹を愛する 2 : 10から5 : 2 辺りまで、そのことが繰り返し教えられています。

神のみこころを求めて祈る 自分の欲しいものを得るために祈るのではありません。主のみこころを求めて祈る、それが救われている者です。なぜなら、主のみこころが最善であることを知っているからです。私たちの人生は自分の欲しいものを何とか得ようとするような人生ではありません。神のみこころが為され神の栄光が現わされることを望んで生きる人生です。ですから、みこころを求めて祈る人、それが救われている者だとみことばは教えているのです。

罪から離れて生きる 罪から離れて生きようとする人たちです。3 : 3から5 : 18までヨハネは同じことを記しています。

神をより深く知ろうとする 神がどんなにすばらしいお方であるかということをより鮮明に理解し、その知識が増し加わって行きます。救われているからその理解力を神は私たちにくださるのです。私たちの神のすばらしさを、私たちはより深く理解して行くのです。

残念ながら、聖霊をいただいている人はみことばを聞いていても、その真理がなかなか理解できません。神のすばらしさが分かりません。しかし、救われた者たちはみことばを通して私たちの神のすばらしさが分かります。神がその様に私たちに働いてくださるからです。ですから、このようにヨハネの手紙を見る時に、救われている者たちはどのような者であるかということが明らかになります。そして、ヨハネは言ったのです。「**神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。**」、このような歩みをしているときに「私は神によって救われている」とその確信を持つと言います。私たち信仰者が不完全ながら失敗しながらも神とともに歩んで行こうとするときに、神に従って行こうとするときに、神は私たちを変えてくださるのです。そして、みことばは私たち一人ひとりに救われていることの確信を与えてくれるのです。

パウロは私たちに、神の子どもであることの証拠を上げてくれました。主のご支配を望む者であり、主との交わりを喜ぶ者であり、主からの保証を持つ者、確信をもっている者、それが神の子であると。このようにして何度もパウロのチャレンジを耳にするときに、私たちはいつも同じことをします。それは、自らの信仰を吟味することです。「私の信仰は本物かどうか」です。そして、神があなたをあわれみをもって救ってくださったのですから、信仰者の皆さん、このすばらしい祝福を喜びながら生きることです。こんなにすばらしい祝福を後に与えようと言ったのではありません。今、神は私たちに与えてくださったのです。神があなたを支配して導いてくださるのです。そのときに私たちは本当に喜びを持って満足を持って生きます。私たちが神が喜ばれることを為すときに私たちが喜ぶのです。神が喜ばれるときに私たちがそれを喜ぶのです。本当の喜びは神から来ます。神が満足されるとき私たち自身も満足します。神が私たちをしっかりと支配して私たちに導いてくださる、それだけでない、私たちはこの偉大な神と親しい者となって、いつでもその方の前に行くことができ、いつでもすべてのことを語ることが許され、この方といつもともに歩むことが許され、そして、永遠を過ごすことができる、この祝福をいただいたのです。

私たちが恐怖がなくなったのです。なぜなら、神の子どもとされたからです。そして、私たちの歩みを通して神は私たちに確信を増してくださるとともに、「感謝です。こんな私が救われたこと、そして、このような祝福にあずかっていることは感謝です。」と言えるのです。私たちはそのことを喜びながら、その主を礼拝しながら、その方のすばらしさを宣べ伝えながら生きて行くのです。皆さんはそのような信仰者ですか？そのように感謝を持って喜びながら歩んでいますか？どうぞ、信仰者の皆さん、この祝福を覚えることです。この約束を覚えることです。これはあなたに神が与えてくださったものです。一人ひとりが自らの信仰を吟味して、救われている皆さんは感謝と喜びをもって従い続けることです。もし、自らの救いが定かでないならば、主の前に救いを求めて出て来ることです。主はあなたに救いを与えてくださる。

私たち信仰者に与えられたすばらしい恵み、悲しいことに、私たちは余りそのことを知らなかった。でも、今日知った者として、新しい歩みを始めてください。神の子どもとしての新しい歩みを！！